

## 日本菌学会会長に選出されて

高松 進（日本菌学会会長）



この度、2009～2010年度の会長をお引き受けすることになりました。これまで一研究者として自分のやりたい研究だけをマイペースでやってきた自分にとって、学会運営は不慣れな仕事ですが、選出されてしまった以上はこの2年間腹を据えて

学会の発展のために努力したいと思います。会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

学会の性格は学会ごとに異なるものですが、菌学会の特徴はアマチュアの菌類同好会との密接な関係にあると思います。ここ10年近く、菌学会大会ではアマチュアの菌類同好会の展示が行われ、その活力はある意味、メインの学会発表を上回るものがあるかも知れません。また、大会とならんで学会の重要な年間行事である菌類観察会の開催も、菌類同好会の協力なくしては成立しがたくなっています。これらのアマチュア研究者の活力を学会活動に生かすとともに、菌類同好会に対して学会側からの支援を積極的に行うことは今後の学会の発展のために欠かせないことであると考えています。本理事会では、菌類同好会で指導的な役割を果たしている会員に幹事として加わっていただき、アマチュア研究者と学会との緊密で良好な関係の維持、発展を重要な課題としていく所存です。また、好評をいただいている「初心者のための論文執筆講座」も引き続き開催していく予定です。

学会の機関紙である *Mycoscience* および日本菌学会会報の発行は、学会の顔として最も重要な活動です。幸いなことに昨年度は長年の念願であった *Mycoscience* 誌の ISI への採択（インパクトファクターの獲得）が本決まりとなり、2011年度には最初のインパクトファクター値が発表されることになりました。これはひとえに歴代の編集委員長や学会長の献身的努力、学会員の協力の賜物と感謝しております。また、2009年2月にはオンライン投稿システムが採用されました。これにより、最近ではとくに海外からの *Mycoscience* への投稿数が飛躍的に増加しております。今後はこれに甘えることなく、*Mycoscience* を真の意味で菌学分野の国際誌にするために、次のような目標を掲げて活動していく予定です。1) より高いインパクトファクター値の獲得 インパクトファクター値というのは、たとえば2011年のインパクトフ

ァクター値は、2008年と2009年に *Mycoscience* に掲載された論文が2010年に何回引用されたかで決まります。このため、引用率の高い総説の積極的な掲載、質の高い論文の掲載を進めるとともに、*Mycoscience* に掲載された論文の積極的な引用を会員各位にお願いします。2) 投稿から掲載までの期間短縮 投稿からいかに短期間で掲載するかが、近年の専門誌の評価に大きくかかわっています。投稿から掲載までの期間短縮を目指し、審査期限の厳格化、オンラインファーストの早期導入を目指します。

会員数の減少などによる菌学会の財政状況の悪化は学会の存続を脅かすことになりかねません。幸いなことに2009年度は科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を獲得することができました。これは、前理事会の皆様の努力のたまものであり、大変感謝しております。しかし、科学研究費の交付は毎年行われるものではなく、来年度以降はどうか分かりません。したがって、科学研究費が獲得できなかった時のための基金の設立を目指します。また、会員数の増加、広告収入、雑誌等販売収入の増加を図ることにより、財政の健全化をはかります。

以下のように会員サービスの向上を目指します。1) 学会の主要な行事である年次大会、菌類観察会を継続的に行うとともに、各種のシンポジウム、ワークショップ、講演会を積極的に企画します。年次大会においては、一般発表とともに学際的なシンポジウムを積極的に企画し、他学会からの参加者を増加させることにより、会員にとってより魅力的な大会運営を目指します。2) ホームページを拡充し、会員への情報提供を迅速化します。3) ニュースレターの発行を継続し、会員相互の情報交流、学会からの情報提供の拡充を図ります。4) 会員名簿および菌学用語集の作成、発行を行います。

国際化の推進 2009年に台中（台湾）で行われるアジア菌学会、2010年にエジンバラ（英国）で行われる第9回国際菌学会、2011年に札幌で行われる IUMS に積極的に参加し、日本の菌学研究を世界に紹介するとともに、若手研究者の積極的な参加を促すため旅費の補助を行います。

以上、これから2年間の菌学会運営を担当するに当たり、抱負を述べさせていただきました。上記の目標を実行するために、現執行部では幅広い年齢層および経歴の方々々に理事、幹事をお願いしました。執行部一丸となつてこれからの2年間を学会発展のためにつくしたいと考えております。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

Email: takamatu@bio.mie-u.ac.jp

## 菌学会 2009～2010 年度の活動と今後の課題

高松 進（日本菌学会前会長）

2009・2010 年度の 2 年間にわたって日本菌学会第 28 期会長を務めさせていただきました。うどんこ病のことしか知らない研究バカの自分にとって会長就任は青天の霹靂でありましたが、このような私が 2 年間の務めを無事に果たすことができたのは、優秀な理事、幹事の皆様の献身的な努力の賜物でした。この 2 年間、学会運営にご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。本稿では前期理事会がこの 2 年間にわたって行ってきた活動を項目別に概括し、残された課題についても記述します。

### 1. 財政の透明化と健全化

a. 科学研究費の獲得 学会運営にとって科学研究費補助金（研究成果公開促進費）は貴重な収入源であり、これを獲得できないと学会の運営に重大な支障を及ぼします。幸いなことに 2009、2010 年度は科学研究費を獲得することができ、また 2011 年度も獲得することができました。これは前期、前々期理事会担当者の多大な努力によるものです。しかし、科学研究費は毎年獲得できるものではありませんので、獲得できなかった以前の苦い経験を忘れることなく、科学研究費に依存しない学会運営を目指す必要があります。

b. 新規収入源の獲得 学会の最も主要な収入源は会員からの会費収入によるものであることは疑いありません。しかし、会費以外の新規な収入源を開発すべく理事会として努力を続けてきました。例えば、広告収入の新規獲得、DVD、新菌学用語集の発行による売り上げ収入の獲得努力を行ってきました。また、Mycoscience の電子ジャーナル購読料による収入も毎年増加してきております。今後、さらに新規の収入源を開発するとともに、これらの収入を増やしていく努力を継続する必要があります。

c. 支出の切り詰め 現在、Mycoscience の印刷費は正会員の会費に相当する最も大きな支出となっています。前期理事会ではこの Mycoscience の印刷費をできる限り抑制すべく、会計担当理事を中心にしてその可能性を模索してきました。実際にその成果が出てくるのは現理事会以降になると思いますが、財政健全化の最重要課題と考えております。和文誌を含む編集費は同規模の某学会の約 7 分の 1 になっております。これは編集委員長や編集委員の手弁当による犠牲的努力によって成り立って

るものであり、特に編集委員長にかかる負担は膨大です。本来是正されるべきものと考えております。

d. 法人化の検討 前理事会では山岡理事を中心に法人化検討委員会を立ち上げ、法人化の可能性を検討してきました。その結果、直ちに法人化することは無理があるが、将来を見据えて法人化の準備をしておくことが必要、と結論しております。

### 2. 会員サービスの向上

a. 終身会員の年齢引き下げ 前理事会では終身会員を従来の満 60 歳以上から 57 歳以上に引き下げました。これにより、57 歳になると 10 年分の会費を納めることにより、生涯会員としての権利を保持し続けることができます。

b. 功労会員制度の新設 学会に貢献された会員を顕彰すべく功労会員制度を新設しました。

c. 菌学会賞、奨励賞、教育文化賞、平塚賞受賞者選出と表彰

d. 名誉会員、功労会員の推挙

e. 会員名簿の刊行 会員名簿を 2004 年以来 6 年ぶりに刊行しました。

f. 出版物の DVD 発行 2009 年までに刊行された Mycoscience、日本菌学会会報及びニュースレターの全ての記事を収録した DVD を 2010 年に発行しました。

g. 新菌学用語集の刊行 1996 年に発行された菌学用語集が好評、売り切れのため、あらたに新菌学用語集を編集、発行することにしました。この原稿を書いている時点ではまだ刊行に至っていませんが、ニュースレターに掲載されるころには発行されているものと思います。編集にあたってご努力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

h. ホームページの充実 ホームページをさらに利用しやすくするために、WEB ページのリニューアル、情報の充実、リンクの充実、Twitter の導入を行いました。また、検索でヒットしやすくなるようにニュースレターに載った書評の掲載を始めました。今後、ホームページをさらに充実させるため、新規なサーバーへの移行を行う予定です。

i. 初心者のための和文論文執筆講座の開催 好評いただいている本講座を 2010 年には大阪市立自然史博

物館で、2011年には東京の国立オリンピック記念青少年センターでそれぞれ開催しました。

### 3. 若手研究者の育成と新入会員の獲得

a. 国際学会への参加補助 学会にとって、学問の将来を担う若手研究者の育成は最も重要な課題の一つです。前理事会では若手研究者の国際会議への参加を促進すべく、AMCに1名、IMC9に4名の参加補助を行いました。

b. 中高校生のための菌類研究講座の開催 若い世代に菌類への興味を持ってもらい、将来の菌学者を育てるべく、2009及び2010年にそれぞれ国立科学博物館において同講座を開催しました。企画運営にあられた方々、講師の方々ご苦労様でした。

### 4. Mycoscienceの質向上と国際化

a. Mycoscienceの発行 Mycoscienceは日本菌学会の国際的な顔、特にアジアを代表する菌学専門誌として重要な存在です。2009年に第50巻、2010年に第51巻をそれぞれ6号ずつ発行しました。編集にあられた矢口編集委員長及び編集委員会の皆様に感謝いたします。

b. インパクトファクターの獲得 日本菌学会の長年の懸案であったMycoscienceのインパクトファクター値の公表がいよいよ本年7月に迫ってきました。このニュースレターが発行されるころにはすでに公表されているかもしれません。インパクトファクターの獲得が決まってから、Mycoscienceへの投稿数がこれまでの約2倍に増加し、特に海外からの投稿が増えています。

c. オンラインファーストの導入 近年ほとんどすべての専門誌で導入されているオンラインファースト（印刷物の発行以前に電子版による発行を行うこと）をMycoscienceでも導入することにしました。これにより、投稿論文の迅速な発行、より高いインパクトファクター値の獲得、投稿数の増加が期待されます。

### 5. 国際集会関係

a. IMC9への参加 2010年8月に英国エジンバラで第9回国際菌学会が開催され、日本菌学会からも100名を超える会員が参加しました。2014年までIMA Executive Committeeの委員として理化学研究所の岡田元氏が引き続き選出されました。次回のIMC10は2014年にタイのバンコクで開催されることが決まりました。

b. AMC2009への参加 2009年11月に台湾の台中市で開催され、多くの菌学会会員が参加、発表を行ったほか、英国菌学会との合同シンポジウムも開催しました。

c. 韓国菌学会との合同シンポジウム開催 2010年9

月に大阪市立自然史博物館において韓国菌学会との第一回合同シンポジウムを開催しました。隣国でありながら菌学関係ではそれほど密接な関係を持ってこなかった両国の相互理解の端緒として期待されます。なお、今回は2012年に韓国で開催する予定です。

### 6. 国内集会関係

a. 菌学会大会の開催 2009年8月に第53回大会を鳥取市の鳥取大学で、2010年5月に第54回大会を東京都町田市の玉川大学でそれぞれ開催しました。鳥取大会では一般発表数97題、東京大会では口頭、ポスターあわせて99題の一般発表があった他、各種シンポジウムやアマチュアのポスター展示もあり、充実した内容になりました。鳥取大会は新型インフルエンザのため開催が5月から8月に延期になりましたが、開催地のご努力により開催することができました。大会委員長の福政先生（鳥取大会）、奥田先生（東京大会）をはじめ、実行委員の皆様には大変お世話になりました。

b. 菌類観察会の開催 2009年は岩手県安比高原で、2010年は愛媛県石鎚山周辺でそれぞれ10月に菌類観察会を開催しました。2009年は109名、2010年は143名の参加者があり盛会でした。1日目は講演会、2日目は観察会と同定会が行われました。懇親会でのオークションも定着したようで、盛り上がりました。実行委員長の貫名先生（岩手観察会）と沖野先生（愛媛観察会）をはじめ、実行委員の皆様には大変お世話になりました。

c. 他学会との合同シンポジウムの開催 2009年と2010年の2回にわたって、日本防菌防黴学会との合同シンポジウムを、東京医科歯科大学を会場にして開催しました。いずれも50名をこえる参加者があり、盛会裏に終了しました。応用を目指す防菌防黴学会と基礎研究が主体の菌学会との摩擦熱の中で何かが生じればよいと考えています。2009年の鳥取大会では日本植物病理学会との合同シンポジウムを開催しました。本年3月の植物病理学会大会でも合同シンポジウムを企画しておりましたが、東日本大震災のため中止。同様に本年3月に予定していた植物分類学会との合同シンポジウムも中止に追い込まれ、残念でした。

d. 公開講演会の開催 2010年9月には大阪市立自然史博物館で菌類生態学講座公開講演会を開催しました。

### 7. 日本菌学会報（和文誌）及びニュースレターの発行

a. 日本菌学会報（和文誌）の発行 2009年に第50巻、2010年に第51巻をそれぞれ2号発行しました。編集委員長の堀江先生、ご苦労様でした。会員の皆様の和

文誌への投稿をお待ちしています。

b. ニュースレターの発行 宮本編集委員長のもとで、年4回の発行を行ってきました。報告、紹介、随想、解説、書評、学会記事など盛りだくさんの内容になりました。

## 8. 今後の課題

a. 若手研究者の育成 学会の活性化は若手研究者が元気かどうかにかかっています。菌学会の現状を見ると会員数に対する若手研究者の比率が低く、いびつな年齢構成になっていることがわかります。これを是正するためには、菌学研究者として生活していくことができる安定したポストを増やす必要があります。しかし、現状では大学における菌学関係の研究室の減少、助教ポストの減少のため、逆にポストが減少傾向にあり、菌学研究者を志す若手がいてもポストがないために研究をあきらめざるを得ない現状にあります。この点に関して、菌学研究に従事しているプロの一人として力不足を感じています。

b. 負担の均等化 現在の菌学会の運営を担っている理事、幹事の構成メンバーは40代から50代前半のプロの研究者が大部分です。これらの研究者は、菌学会運営の担い手であるとともに、日本の菌学研究を推進しなければならない中心メンバーでもあります。残念ながら、菌学会ではこのメンバーの絶対数が少なく、特定の人間に菌学会運営の負担が集中している現状にあります。これらの人たちが菌学会の運営のために自分の研究を犠牲にすることがないように、会員一人一人が負担の分散、均等化を考える必要があります。

## 書評

### キノコの文庫本・新書本

布村 公一（東京都小平市）

私がまだ中高の教員をしている頃、キノコの文庫本を読んでいるといったら、国語の先生からそんな本があるのかと怪しまれたことがあります。学会の皆様もあまり知らないかもしれませんが、文庫・新書それぞれ何冊かを数えます。文庫の嚆矢としては昭和8年発行のアルス科学写真叢書 小林義雄・加藤邦三著「きのこ」Ⅰ、Ⅱ次に昭和17年三省堂発行 今関六也著「原色きのこ」この増補版1959年発行「原色キノコ」、昭和48年発行保育社カラー自然ガイドの1冊 今関六也・本郷次雄共著「きのこ」、1990年発行 ちくま文庫 画家 渡辺隆次著「キノコの絵本」、1996年発行光文社文庫 森毅編「キノコの不思議」、2006年中央公論新社 発行日野巖著「植物怪異伝説新考」上、下 以上、新書は昭和50年発行 講談社BLUE BACKS「菌類の世界」小林義雄著 同じ出版で「植物の病気」酒井隆太郎著 1993年中公新書「キノコとカビの生物学」原田幸雄著、そして今回発行されたソフトバンククリエイティブ株式会社発行 サイエンス・アイ新書「キノコの魅力と不思議」小宮山勝司著です。いずれも著者が研究を進めてから書かれた著書で力作ぞろいといえます。

この新しい本の著者は菌学会の方々もよくご存知と思われませんが、長野県須坂のペンションのオーナーで写真家、昨年秋には朝日新聞夕刊「人脈記」でも紹介されました。本人も『学者でもなければ研究者でもない、無学なキノコバカ』と『はじめに』で自己紹介しています。さらに『むずかしいキノコのことや、わからないキノコのことを調べたい人にはそれなりに別の本で調べていただくことにして、できるだけ専門用語は使わないで、まったくキノコに無関心であった人向けに書こう。』と述べられています。そんなわけで索引から見ると123種のキノコを取り上げていますが、過去に著者が書いた図鑑とは異なった書き方をしています。特に14種の中毒体験は実際に食べた状況が書かれていて参考になりますし、その他の毒キノコに関する記述も多くあります。またナガエノスギタケが生えている所を撮った写真を相良先生が知るところとなって、同行採集する様子はとても興味を引かれます。モグラの生きているところの写真などは貴重です。この本を通して一般の方や少年がキノコに関心を持ち、研究者が出てくることを望むのは私ばかりではないと思います。